善隣

No.516 通巻783

2020年（令和2年）11月1日発行（毎月1日発行）

2020 11

一般社団法人 国際善隣協会

善隣　目　次　2020年11月号

公開講演会記録

習近平主席に立ちはだかるトランプ米大統領、
香港、台湾、そして新型肺炎 ……中澤克二　2

「スーホの白い馬」の真実 ……ミンガド・ボラグ　9

陶々俳壇 ……馬場由紀子選　17

尾竹一枝という女性（ひと）……渡邊澄子　18

エッセイ

新橋界隈の変遷④ ……瀬﨑　明　27

中国ウォッチング ……編・訳　上松玲子　28

協会通信・会員だより・同好会だより ……　30

2020年11月の行事予定 ……　31

みんなの写真館 ……　30
（藤沼弘一、新宅久夫）

善　隣　第516号　通巻783号
2020（令和２）年11月１日発行
発行所　〒105-0004　東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人　国際善隣協会
TEL　03（3573）3051
FAX　03（3573）1783
発行人　矢野一彌
編　集　原田克子
校　正　朝　浩之、福冨和美
印刷所　㈲ゆにおんプレス
定価　一部400円　年額4,800円
振替　00120-0-145956
国際標準逐次刊行物　ISSN 0386-0345
ⓒ禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国との相互理解を深め、友好親善・交流を推進しています。
一般社団法人　国際善隣協会

公開講演会記録

習近平主席に立ちはだかるトランプ米大統領、香港、台湾、そして新型肺炎

日本経済新聞東京本社編集委員兼論説委員　中澤克二

1月30日、世界保健機関は中国で発生した新型コロナウイルスによる肺炎について「国際的に懸念される公衆衛生の緊急事態」と宣言した。中国トップの習近平国家主席は、昨年以来、様々な難しい課題に直面してきた。貿易戦争を戦うトランプ大統領の米国、空前の大規模デモが起きた香港、民主進歩党（民進党）の蔡英文総統が大勝利した台湾の政局、国内経済の急減速。これに新型肺炎という困難な課題が加わった。これらの課題は1つ1つ見れば、まったく別々の問題に思える。しかし、つぶさに観察すると、見かけと違うことは明らかだ。根底には共通する問題が存在するのだ。ここでは時間を遡る形でこの入り組んだ問題を考えたい。

■根底にある「習近平帝国の暗号２０３５」

3年前の２０１７年秋に開かれた第19回中国共産党大会では、その時点で就任5年にすぎない習近平氏の業績について重大な決定があった。「習近平新時代」が思想という形で共産党規約に明記されたのだ。

この意味を極めて分かりやすく説明した人物がいた。党大会後、来日した中央党校副校長何毅亭氏だった。中央党校は共産党幹部の教育を担う重要な組織だ。とりわけ何毅亭氏は理論面で習近平を支える側近で、今回の党大会報告を含めたスピーチライターの一人だ。

「中国共産党政権の歴史は3つに分けられる。第1は毛沢東時代。すなわち人民と共に立ち上がった創立期だ。第2は『改革・開放』政策の導入で国家と民衆を富ませた鄧小平時代。そして第3は強い国家をつくった習近平新時代だ」。

共産党の理論づくりを担う重鎮の公式見解だけに驚きだった。共産党の歴史はすでに書き換えられていた。何毅亭氏は、日本の国会内に位置する衆議院第二議員会館で国会議員らを前にこう宣言した。内容を簡単に整理し、少し補足すると以下のようになる。

①毛沢東時代＝１９４９年の建国から76年の毛沢東の死を経た78年まで（中国語で「站起来」の時代）。

②鄧小平時代＝１９７８年に「改革・開放」政策導入を宣言した鄧小平の時代。

97年に鄧小平は死去するが、その指名でトップに就いた江沢民、胡錦濤の執政期を含む（中国語で「富起来」の時代）。

③習近平時代＝鄧小平が提起した少し余裕のある「小康社会」実現を見据え、生産力不足解消に重点を置く「主要矛盾」の定義を変更。経済と軍の現代化建設を進め、強国を実現する（中国語で「強起来」の時代）。

習近平の新時代はまだ5年にすぎなかった。だが、反腐敗運動による厳しい党の統治などで、毛沢東時代と鄧小平時代に匹敵する実績をすでに挙げたというのだ。そして江沢民と胡錦濤の執政期は特に名前を付けるほど独自性がないと宣言され、鄧小平時代の中に埋もれてしまうひどい結果になった。

なお存命中で19回党大会にも出席した高齢の江沢民氏と、胡錦濤氏はこの党大会総括をどのような気持ちで聞いたのか。どう考えても穏やかに耳を傾けたとは思えない。

そもそも輪郭がぼやけていた江沢民、胡錦濤の時代は、共産党の歴史に名前入りで刻まれる余地が消えた。自分たちが選んだはずの若輩の後継者の習近平氏は早々に自らの新時代の到来を高らかに宣言。長老らは押さえ込まれてしまった。

では、この習近平新時代は今後、いつまで続くのか。それは後世が決めることだ。しかし、現時点で習近平氏自身の視線がどこに注がれているのかは極めて重要である。

そもそも習氏の国家主席として憲法上の任期は2期10年が終わる２０２３年まで。慣例に従えば、党総書記の任期もその1年前の２０２２年までだった。

まもなく習近平新時代が終わるのか。そんなはずはない。毛沢東時代は30年間近く続いた。次の鄧小平時代でさえ１９７８年の「改革・開放」政策の宣言から鄧小平の死までの19年間に江沢民、胡錦濤両政権を加えれば合計34年間もあった。

ここに考えるべき重要な論点があった。党大会報告で初めて登場した２０３５年という数字である。習近平は２０２０年に小康社会（少し余裕のある社会）を達成した後、次の現代化建設の第一目標を２０３５年に置いた。

なぜ２０３５年なのか。今から21世紀中葉までは30年余り。そのほぼ中間地点だという理屈は成り立つ。２０２１年の中国共産党設立百年と、49年の新中国成立百年のちょうど真ん中でもある。

しかし、それだけではなかった。党大会後、インターネット上に登場した書き込みには、なかなか意味深な内容があった。２０３５年目標の読み解きである。

■毛沢東倣う永久の主席さえ

「党大会では次の現代化建設の目標を２０３５年に置いたそうだ。習近平はまさか35年まで主席を続ける気なのか……」。

「そうだろう。２０３５年に習主席はちょうど永遠の主席だった毛沢東が亡くなった年齢になる。満年齢で82歳だ。それをにおわせる35年という目標設定にも見える」。

これを政治好きの北京っ子らのざれ事と決めつけるのは早い。傍証がある。例えば共産党規約の大胆な変更である。中国憲法にあった「中央軍事委員会は『主席責任制』を実行する」との文言が、今回、初めて党規約にも盛り込まれた。

中国軍の指揮系統で実質的な意味を持つのは共産党の中央軍事委だ。国家の中央軍事委は名目にすぎない。今回の改正では、党の軍隊の最高指揮官である主席の地位を規定上も明確にした。「主席責任制」とは簡単に言えば軍事行動決定の際、中央軍事委の主席が全責任を負って決めるとの意味だ。国家主席や党総書記ではなく、党中央軍事委主席がすべてを決める根拠ができた。

これで5年後の党大会で習近平が仮に国家主席と党総書記から退いても、党中央軍事委主席に残ればすべてを動かせる。軍内での習氏の呼称は17年夏から『首長』ではなく『主席』に変わっていた。「軍トップとしての3期目が視野に入った」。こう見る政治関係者は多かった。

２０３５年の目標設定については、国家計画の面から見ても極めて精緻な計算がある。それは先に紹介した中央党校副校長、何毅亭も言及した。「（49年の）建国百年を見据えてきた現代化建設を基本的に達成するという目標を１５年ほど前倒した」。

■暗号解くカギは超長期政権

この発言を聞いてハッとした。極めて重要な発言である。党大会報告に盛り込まれた主要なプロジェクトはすべて２０３５年を目標に計画されている。

新シルクロード経済圏構想「一帯一路」、北京・天津・河北省を一体化する新首都圏構想、宇宙開発強国、インターネット・ビッグデータ・人工知能（ＡＩ）と実体経済との高度な融合によるインターネット強国とデジタル中国の実現……。

これらはすべて35年に向けて動き出す。習近平は「プロジェクト２０３５」のスタートを宣言したのだ。

これと並行して進めるのが、あらゆる分野での共産党の指導の強化だ。政府、軍、外資を含む民間企業、教育機関など中国内に存在するすべての組織、団体に対してである。

東・西・南・北・中――。習近平が読み上げた党大会報告の一節だ。東西南北ばかりか、その真ん中までも共産党の色に染めるという徹底ぶりである。

「これは最近の経済発展で党の指導が弱体化していたという反省に立った素晴らしい措置だ」。共産党の対外宣伝部門の関係者が説明している。様々なプロジェクトが成果を挙げる２０３５年、中国は外の世界との融和を目指すのではなく、共産党組織の強化によって独裁体制を維持する独自の領域を築くと宣言しているのだ。

問題は、中国の経済成長率は徐々に低下している点である。今後は、２ケタはおろか６％成長さえ難しい。とはいえ中国の経済規模はすでに世界２位だ。

「17年から18年間もてば、どんなに少なく見積もっても経済規模のうえでは米国と肩を並べ、抜き去っているに違いない」。中国の指導層はそう考えた。

■２０３５　バノン氏の警告

この「２０３５」の意味を鋭い勘で喝破した重要人物がいた。党大会直後の17年11月に来日したトランプ大統領の首席戦略官だったスティーブ・バノン氏である。過去の問題の暴露でトランプとの確執も取り沙汰されたバノン氏だが、習近平の長大な党大会報告を８回も繰り返し読んだという。そしてこう指摘した。

「中国共産党政権は、権威主義的な手法で世界経済を主導するため、数年単位ではなく、何十年、世紀単位で政策を実現する計画を考えている。そして、まずは、どんなに遅くても２０３５年までに米国を抜き去って世界一の経済大国になろうとしている。さらにその後、世界の覇権国になるというメッセージだと考える。あれ（党大会報告）は、私たちへの警告だ」。

厳しく、辛辣な分析だった。欧米が主導する世界が衰退し、共産党政権が覇権国になる深刻さを報じてこなかったとして既存メディアにも矛先を向けた。

「共産党政権下でも資本主義が進めば、民主と自由主義が進むと思っていた。だが、実際は逆に進んだ。中国の指導者は国際ルールに従うつもりはない。共産党

の計画を厳格に実施しているだけなのだ」。

「中国の発展モデルは、過剰生産とデフレ輸出だ。儒家思想の権威主義の下で動いており、欧米のユダヤ、キリスト教、資本主義経済の立場は失われていく」。

中国民主化運動の研修会や、インタビューでの一連の発言からは、かなり強い危機感が見て取れる。

バノン氏が矛先を向けた過剰生産とデフレ輸出は、対米貿易での輸出攻勢と共に、「一帯一路」への批判と警戒が込められていた。まさに「一帯一路」は当初、中国内で処理しきれない鉄鋼などの過剰生産品を海外で処理するために錬られた構想だった。

中国が主導するアジアインフラ投資銀行（ＡＩＩＢ）、シルクロード基金と連動しながら、「一帯一路」の沿線国家に中国の経済的な影響力を浸透させていくのである。

一連の構想も２０３５年を見据えている。焦る必要はない。失敗は許されないのだから、まず足元を固めてから一歩一歩、階段を登ればよい。

バノン氏が喝破したように、中国共産党のプロジェクトは何十年、いや世紀単位で着々と進んでいた。

■軍建設「プロジェクト２０３５」へ号令

もう１つ重要だったのは、軍の現代化建設の第一目標も２０３５年に置いた点だ。巨大な国家の安全を保障する国防・軍隊の建設の目標も15年、前倒したのだ。これまでは、21世紀半ばまでの達成が念頭にあった概念である。それは「二つの百年」の後ろの大イベント、建国百年に当たる２０４９年を目指すものだった。

だが、こんな甘い考え方で軍建設を進めても世界最強の軍には到底なれない。そもそも、これまでの中国軍は、内部で将官の地位を金銭で売買するような腐敗にまみれていた。当然、上層部の汚職を知る一般兵士の士気は上がらない。

装備も最も重要な部分が自主開発のため、これまでは進化のスピードが遅かった。近年、中国の基礎的な工業力のめざましい発展が、軍事部門にも波及しつつある。

しかし、中国軍の装備が1ランク上がっても、世界ナンバーワンの軍事強国、米国はその時、さらに1ランクか、1・5ランク先に行っている。なかなか追い付けない。

とにかく中国の経済的な体力が旺盛な今後15年ぐらいのうちに一気に米軍との差を縮めないと永遠に追い付けない。

そのためには、現代の機械化された電子戦に対応する人材を育て、武器・装備を近代化し、統合作戦能力、全域作戦能力を高める。それが軍現代化の「プロジェクト２０３５」だ。

前段として、すぐ先の２０２０年にまず機械化と情報化を基本的に実現するとした。その後、15年を費やして、世界ナンバーワンの軍事強国、米国のレベルに迫って行く計画である。軍建設の「プロジェクト２０３５」が成るなら、21世紀中葉の世界一流の軍隊完成が夢ではなくなる。この時、堂々と「米軍と戦える軍隊になった」と宣言できる。

習近平氏は同じ党大会報告で、中国は永遠に覇権を唱えないと宣言した。だが、中国が最終的に目指す軍事強国は、周辺国を含む世界の国々から見た場合、覇権国家そのものになる。

こう考えれば、バノン氏が指摘した中国が世界の覇権国になる深刻さが理解できる。その時、かつての覇権国、米国は中国の下に事実上、跪いているかもしれない。

軍建設の「プロジェクト２０３５」を習近平氏がいかに重視しているか。それ

は党大会閉幕後、3日しかたっていない10月27日、軍幹部を集めた会議でも明確になった。

「力一杯努力し、２０３５年に国防と軍隊の現代化を基本的に実現しよう」。習近平氏は党大会で初めて言及した「２０３５」とする数字を強調した。

こう考えれば「２０３５」は、第19回党大会報告に埋め込まれた「習近平の暗号」に見えてくる。暗号を解くカギは超長期政権だ。それは今後、長く続く「習近平新時代」の確立を裏打ちする。

２０２１年には共産党創設百年という大切なイベントが控えている。「二つの百年」の最初の行事は、２０２２年まである習近平の総書記として2期目の任期中に行われる。

それは極めて重要な行事ではあるが、習氏にとって通過点でしかない。２０２０年に鄧小平氏が唱えた「小康社会」の達成が宣言されるのと同じように、すでに見えてしまった行程なのだ。

歴史に名をととどめるために最も重要なのは、この党大会で自ら設定した２０３５年という目標のクリアである。

■「２０３５」へ国家ビッグデータ戦略が始動

「プロジェクト２０３５」を巡っては、国家ビッグデータ戦略が鳴り物入りで始動した。17年12月、習近平は政治局の集団学習で、国家ビッグデータ戦略の推進による「デジタル中国」の実現を訴えた。

この中国でのビッグデータ戦略は、経済的発展上の重要性と共に、国家のガバナンスとの関係に焦点を当てられている。つまり共産党の統治継続を確実にする国家安全上の課題なのだ。

それは蓄積された個人データを国家が吸い上げてフル活用し、テロ防止を含む安全確保に役立てる。自由世界で強調されている個人情報の保護を巡っては、犯罪防止の観点があってもプライバシーを守る観点は見られない。インターネットの普及によって情報が自由に行き交うのではなく、逆に国家にすべて集約され利用される。

例えば、中国では高速鉄道（新幹線）だけではなく、在来線に乗る際もＩＣチップ内蔵の身分証明カードが必要だ。これは西安の世界遺産、兵馬俑など大観光地に入る場合も同じ。窓口で買う場合は番号をチェックされ、自動販売機での購入でも番号が記録される。

都市の繁華街の街角には、くまなく監視カメラがあり、地下鉄、バス、タクシーの車内も撮影されている。個人がスマホ決済する金額、位置もデータとして蓄積される。これらのデータを集約すれば、個人の位置、行動、支払い状況を国家がすべて把握できる。

鉄道で移動する個人については、すでにビッグデータの活用が進んでいる。特にパスポート提示が義務付けられる外国人は常に監視対象だ。入国から出国まで位置を特定されていると考えてよい。

技術的な発展で蓄積されるビッグデータ。その存在によって14億という膨大な数の中国人民の管理が容易になる。極めて逆説的だが、その重要性を中国統治者らはかなり正確に理解している。管理社会は、すでに出現している。

■米中対立の決め手は18年の憲法改正

一連の米中の覇権争いの一環である貿易戦争は、習近平氏がいつまで中国トップの地位にとどまるつもりなのか、という重大な政治問題と直接、関わっている。

18年3月の全国人民代表大会（全人代、国会に相当）では突如、それまで2期10年までとしていた国家主席の任期制限を撤廃する憲法改正がなされた。習近平氏は「終身の主席」さえ可能にした。

トランプ氏のアメリカが「中国つぶし」

の腹を最終的に固めたのはまさにこの時だった。前年に明らかになった２０３５年までに米国を追い越すという「習近平コード」の意味を米国がはっきりさとったのだ。終身主席、習近平氏が世界の秩序を揺るがし、米国に代わって世界に君臨する。それを米国がやすやすと許すはずがない。

とはいえ、トランプ氏はかなり早くから、習近平氏の野望を見抜いていた。その証拠がある。話は17年11月に遡る。かつて中国皇帝が住んだ北京の紫禁城に習夫妻とトランプ夫妻はいた。習氏はトランプ氏のためだけに紫禁城を貸し切り、自ら案内した。一党独裁国家のトップの豪気さだった。だが、それは裏目に出てしまった。

「習主席。あなたは終身の王様（king）だ」。

この場でトランプ氏は習近平氏が秘密裏に準備していた国家主席の任期を撤廃する憲法改正への動きを指摘していたのだ。「いやいや、私は主席です」。習は説明する。だが、トランプに心の中を見透かされた習は心底、ドキッとしただろう。

「エンペラー（皇帝）」ではなく「キング（王様）」と指摘したのは、中国の封建制度史への理解不足からなのか、それとも両者の違いを知ったうえで、あえて習近平氏は格の高いエンペラーではない、と見たのか。この辺りも非常におもしろい。この時、習近平氏はその３、４か月後の実現に向けて秘密裏に準備していた憲法改正が「もしかして米側に漏れているのでは」と疑ったことだろう。

この紫禁城での２人の巨頭の会話は、米国を越す世界一の中国を実現したい「終身の王」とトランプの長く激しい貿易戦争の序章だった。

■5月大逆流、「私が一切の結果に責任持つ」

19年５月初めは、米中貿易戦争を巡る大きな転機だった。中国政府は、米中双方が約５か月間にわたって積み上げてきた７分野１５０ページにわたる貿易協議合意文書案を１０５ページに圧縮したうえで、一方的に米側に送付したのだ。

中国指導部内で「不平等条約」に等しいと判断された法的拘束力を持つ部分などが軒並み削除・修正された。ページ数で考えても実に３割の破棄だった。それまで米側が重視してきたのは、中国の構造改革実行を担保する法的措置である。その重要合意のかなりの部分が白紙に戻った。世界を揺るがせた米中協議の「５月大逆流」と呼ばれる事件である。

中国側にもやむにやまれぬ事情があった。「内政干渉を法律で明文化するような不平等条約は受け入れられない――」。19年春、共産党内では、こうした声が日に日に高まっていた。70年前の新中国建国に当たって共産党は、過去の封建王朝が結んだ「不平等条約」を厳しく批判。決してその轍（てつ）を踏まないと民衆に誓っている。

アヘン戦争の終結時、清とイギリスが結んだ南京条約（１８４２年）、日清戦争の下関条約（１８９５年）などが代表的な不平等条約である。それを結んだ清王朝は滅んでしまった。今回の米中合意案が本当に不平等条約なのかには疑問がある。とはいえ共産党政権にとっては一大事だった。

米国は過去の中国の行動から曖昧な合意では構造改革が実際に履行されるか信用できないとして、法的措置による担保を求めた。官民の様々な場での強制的な技術移転の禁止、国際的な技術・知的財産権の窃取の禁止、国有企業補助システム及び全企業への輸出補助金の廃止。範囲は幅広かった。

■香港、台湾問題へ波及、習氏に打撃

米中貿易戦争は習近平氏の求心力に大きな影を落とした。トランプ政権の対中制裁関税は、中国の対米輸出抑制によって米国の貿易赤字を減らす手段だと見られてきた。しかし、中国にとって痛いのは別の部分だった。

外資の対中投資が鈍り、それまで中国で製造していた工場までもが外に移りつつある。ベトナム、フィリピン、ミャンマー、インドネシア、インド、バングラデシュ。行き先は様々だ。一連の動きによって中国の産業基盤が徐々に弱まる恐れが出てきた。

新たに起きた新型肺炎という問題は、これに拍車をかけるだろう。米政府は、中国人だけではなく、14日以内に中国に滞在歴のある外国人の入国も制限する措置を打ち出した。

20年1月15日、米中がやっとたどり着いた「第1段階合意」も一時休戦でしかない。根本解決には至らない。これは台湾の政治・経済情勢にも大きく関係している。中国大陸に進出していた台湾の企業は通信分野などを中心に台湾の工業団地に戻る動きを見せている。

こちらは19年1月に習近平氏が改めて提案した「一国二制度による台湾平和統一」にも不利に働く。台湾経済の中国への依存度が少しずつ落ち始めているのだ。香港でも「逃亡犯条例」への反対をきっかけにした最大２００万人（主催者発表）という大規模デモが起き、「一国二制度」の形骸化が大問題になった。これは19年11月の香港区議会選挙で民主派の大勝という現象を生んだ。さらに20年1月の台湾総統選で民進党の蔡英文氏が過去最高得票を獲得する歴史的な勝利につながった。

ここまで見てきたように、習近平氏を主役とする中国の国内政治が周辺部と世界に影響している。「習一強」体制が明確に打ち出した「２０３５年に米国に経済的に追い付く」という目標。これがトランプ氏率いる米国の警戒感に火を付け、米中貿易戦争など覇権争いが顕在化。最後は中国経済の急減速につながった。

昨年以来の香港問題も似ている。「習一強」の中央集権体制が香港の「一国二制度」を侵食している。香港人がそう見なしたことが発端である。この影響は、最後には台湾にまで及んでしまった。

■新型肺炎では初動対応に遅れ

武漢を起点とする新型肺炎が中国全土と各国へ感染者を広げた問題は、初期の情報隠蔽による対処の遅れにあるのは明確だ。これは武漢市長が後に認めている。遠因は「今後も長くトップにいるはずの習氏の顔に泥を塗れば、自らが処分の対象になりかねない」という官僚らの恐怖心にある。中央、地方政府とも身を守るため責任を回避し、無策を続けた。

すべて中国の内政の問題につながっている。習近平氏は、目の前に立ちはだかるトランプ氏の米国、香港・台湾、国内経済、そして新型肺炎という壁を乗り越えて22年の共産党大会で実質的なトップを維持できるのか。中国は今後も世界の視線を集め続けるだろう。

（２０２０年1月30日・公開フォーラム）

筆者略歴（なかざわ　かつじ）

早稲田大学卒業。１９８７年日本経済新聞社入社。98年から3年間、北京駐在。東日本大震災の際、震災特別取材班総括デスクとして仙台に半年ほど駐在。２０１２年から中国総局長として北京へ。２０１４年度 ボーン・上田記念国際記者賞受賞。現在、編集委員兼論説委員。

主な著書『習近平の権力闘争』『中国共産党　闇の中の決戦』『習近平帝国の暗号２０３５』（いずれも日本経済新聞出版社）。

公開講演会記録

「スーホの白い馬」の真実

通訳・翻訳家　ミンガド・ボラグ

1　「スーホの白い馬」とは？

モンゴルの民族楽器である馬頭琴の起源にまつわる話「スーホの白い馬」は、日本では子どもから大人まで世代を越えて広く知られている。１９６７年に福音館書店から『スーホの白い馬』（大塚勇三・再話、赤羽末吉・絵）という大型絵本が出版され（図１）、翌年からこの話は光村図書出版小学校国語教科書「こくご」（２・下）に掲載された。

現在、一般的に読まれている絵本『スーホの白い馬』の初版は１９６７年であるが、１９６１年に福音館書店発行の月刊絵本「こどものとも」10月号として発行された『スーホのしろいうま』が初出である（図２）。ただし、この『スーホのしろいうま』には馬頭琴という楽

図１

図２

器が登場しない。

教科書の場合、１９６８年度版（１９６８〜１９７０）と１９７１年度版（１９７１〜１９７３）では「白い馬」というタイトルで掲載されていたが、１９７４年度版から「スーホの白い馬」に変わり、現在に至る。また、教科書の挿絵は１９６８年度版から２００２年度版では赤羽末吉の絵が使われていたが、２００５年度版からリーリーシアン（李立祥）の絵に変わっている。

今回は拙書『「スーホの白い馬」の真実――モンゴル・中国・日本それぞれの姿』（風響社、２０１６年）を中心に話を進めたい。

2　『スーホの白い馬』の出典について

驚くことは、この話はモンゴル民話だといいながら中国語で書かれた「馬頭琴」という話を日本語に翻訳する形で作られたものであることだ。これについて再話者の大塚勇三も、福音館書店の編集長だった松居直も様々な場面で話している。

では、大塚勇三は、この話をどこから入手したのか？　これについて私は大塚勇三本人に直接尋ねたことがあるが、本人は高齢のためほとんど覚えていなかった。だが、自ら中国語から日本語に翻訳したことや、絵本ではなく、分厚い書物を参考にしたことは話してくれた。大塚勇三のこの答えから考えられるのは、下記に示す３つの書物である。

『中国民間故事選』
　作家出版社、１９５８年
『中国民間故事選』
　人民文学出版社、１９５８年
『中国民間故事選』（第一集）
　人民文学出版社、１９５９年

この３つの書物に中国人作家の塞野が整理した「馬頭琴」という話が掲載されている。書物の出版年や出版社が異なるものの掲載された「馬頭琴」の内容が完全に同じである。

なお、１９５６年４月に上海少年児童出版社から『馬頭琴――内蒙古民間故事』という本が刊行されているが、この本は全11話の約50頁のものである。また、この時代、連環画版『馬頭琴』も刊行されているが、大塚勇三の「絵本ではなく分厚い書物を参考にした」という答えから、これらの書物を参考にした可能性は低いと考えてよい。時をほぼ同じくして塞野が整理した「馬頭琴」の日本語訳が出ているが、大塚勇三の「自ら中国語から日本語に翻訳した」という話から、これらのテキストを使用した可能性も低くなる。

3　絵本『スーホの白い馬』の誕生秘話

絵本『スーホの白い馬』の誕生について福音館書店の編集長だった松居直や、その絵を描いた赤羽末吉が様々な回想を残している。それによれば、松居直編集長が「中国をはじめアジア各国の昔話を日本の子どもたちに紹介したい」と思っていた最中、赤羽末吉の方から「モンゴルのものを描きたい」という申し入れがあり、そこで大塚勇三の原稿が生まれたという。

では、なぜ赤羽末吉はモンゴルについて描きたかったのだろうか。戦前、内モンゴルの東部地域が、日本の傀儡国家だと言われている満洲国に編入されていて、赤羽末吉もそこで働いていた。

１９４３年に赤羽末吉とその絵描きの仲間が、関東軍の特務機関という組織の下請け仕事で内モンゴルの東北地域の王爺廟（現「ウランホト市」）に建設されたチンギス・ハーン廟の壁画を描くことになり、その準備調査として、一団は放

牧文化が盛んなシリンゴル草原を旅した。その旅がきっかけで赤羽末吉がモンゴル草原に魅了されたとのこと。

4 「スーホの白い馬」について調べたきっかけ

私は馬頭琴奏者でもある。来日後、南は沖縄から北は東北地方まで数多くの小学校で「スーホの白い馬」の学習の一環として馬頭琴の「出前授業」を実施してきた。こうして日本で「スーホの白い馬」の学習に関わってきたのだが、そうした日々のなかで「この話は一体どこからきた話なのか？」という疑問や違和感がこみ上げ、膨らんでいくようになった。

日本では一般的に「スーホの白い馬」はモンゴル民話だと受け止められている。しかし、モンゴル国はもちろん、中国内モンゴルにおいても「スーホの白い馬」といった話は存在しない。白馬を矢で殺す、といったことはモンゴル人にとってはあり得ない、極めて不自然な描写が多数散りばめられており、モンゴル民話というにははなはだ多くの疑問を感じる話である。何よりも驚きなのは、この話がモンゴル民話だといいながら、そもそもは中国語で書かれた「馬頭琴」という話を日本語に翻訳するという不自然な形で作られた話だということだ。

極めて不自然な描写の源流はこうした経緯にあるはずだ。そう思った私は、中国語の「馬頭琴」の整理者、塞野に聞くのが一番手っ取り早いと考えた。しかし、それはそう簡単ではなかった。「馬頭琴」が初めて書物に掲載されたのは1950年代であることを考えると、すでに整理者が亡くなっている可能性もあった。彼に関する有力な情報は得られないまま何年もの歳月が過ぎていった。そこで私は中国語の「馬頭琴」の舞台である「チャハル草原」を中心に調査することを決意し、現地に出向くことにした。

5 なぜ白馬を矢で殺すことは不自然な描写なのか

私が行った聞き取り調査の中で「馬が死ぬところが違う。モンゴル人は馬に対して特別な感情を抱いている民族であるから、どんなに悪い人でも馬を矢で殺すことはない。特に自分の好きな、しかもそんな立派な馬を矢で殺すことはあり得ない」など、白い馬の死に方に疑問を問いかけている人が多かった。その中、一人の厩務員の男性が、非常に鋭い指摘をしている。少し長くなるが、掲載しておこう。

これはモンゴル文化をよく知らない人が手を加えた話だと思う。実は、背中に鞍があり、手綱を引きずって逃げている馬は一瞬で捕まえることができる。馬は鞍と手綱が邪魔になって逃げにくいからね。背中に鞍がなく、手綱もなく、人も乗っていない裸の馬でも、人が馬に乗って追い掛ける場合は必ず追いつく。人は逃げている馬の動きをうまく読み取り、作戦を立てて追いつくことができるし、また裸の馬より、人が乗って走っている馬の方は、バランスがいいので走りが速い。だから必ず追いつくのである。要するに、逃げている白馬を矢で殺す必要はない。

原話では、白馬の死因は窒息死だったと思う。馬のことを知らない人には分からないだろうが、馬の長距離競走などの場合は、騎手が手綱をリズムよく引っ張ったり緩めたりして、馬が息をしやすくしないと馬が窒息することがある。というのは、馬をコントロールするために馬にハミ（馬銜）という金属製の棒状の物をくわえさせ、そのハミの両端が手綱に繋がっているので、馬は息をしにくいのである。だから、走っている最中、騎

手が手綱をリズムよく引っ張ったり緩めたりして両者が息を合わせないといけない。ところで、わしが昔聞いた話では、白馬に乗って馬の長距離競争に出場した主人が、この作業が上手にできなかったので白馬が窒息してしまった。それで、その主人が悔しさや悲しさのあまりに馬頭琴を作ったという話だったと思う。

私見であるが、おそらく窒息死だと物語が成立しないので、中国語版「馬頭琴」の整理者などによって「弓に打たれて死ぬ」というリアルな死に方に変えられたと思われる。モンゴルの歴史や文化について少し理解のある人なら必ず聞いたことがあると思うが、チンギス・ハーンやその後継者たちは、生き物をむやみに殺害することを固く禁じてきたし、今日もその習慣が固く守られている。例えば、１７０９年に書かれた、モンゴルの習慣法をまとめた書物である『ハルハ・ジルム』には「健康な（病気ではない、不具ではない、欠陥のない）馬、エジプト鵞鳥、蛇、蛙、野鳥（ブラマン鴨）、山鹿の仔、孔雀、犬などを殺してはならない。殺す者があれば、何人たるを問わず、目撃者をしてその人の馬１頭を没収せしめる」と事細かく規定されている。だから、いくら最悪の殿様（中国語版では「王爺」）であっても馬を矢で殺すとは考えられない。

引用中の「背中に鞍がなく、手綱もなく、人も乗っていない裸の馬でも、人が馬に乗って追い掛ける場合は必ず追いつく。（中略）裸の馬より、人が乗って走っている馬の方は、バランスがいいので走りが速い」という部分は、素人には少し難しい話だと思う。簡単に説明すると、乗馬用の馬の場合、毎日、人が乗ることによって、人が乗ってこそバランスが取れるようにできている。だから、人が乗っていないと、自動車で言う「重量バランス」が崩れるのでリズムよく走ることができなくなるということである。

6　「馬頭琴」にみられる不自然な点

モンゴル放牧文化の中で生まれ育ったモンゴル人なら誰もが、中国語版「馬頭琴」や、その翻訳とでも言うべき「スーホの白い馬」を読んで「何かが違う」と違和感を覚えるだろう。私もそのひとりだった。

ここでは、その調査の結果を踏まえて、「馬頭琴」にみられるモンゴル文化と矛盾する事象について述べたい。

第１に、スーホが仔馬と出会った時間帯が不自然である。「スーホの白い馬」では「ある日のことでした。日は、もう遠い山のむこうにしずみ、あたりは、ぐんぐんくらくなってくるのに、スーホが帰ってきません」と表現している。つまり、スーホが暗くなるまで草原で羊を放牧していたということになる。これが不自然である。というのは、羊は暗くなるとその場で群がり、鞭打ちをしても動こうとしない性質をもっているからだ。もし羊の群れが草原で宿泊したら、それこそ群ごと狼の餌食になるに違いない。それゆえに、羊飼いは朝になると羊を牧草地に連れて行き、日が沈む前に連れ戻すのだ。

第２に、白い馬が羊を守って狼とたたかうところが不自然である。草原では、馬の群れと狼の群れがたたかうことはよくあるが、馬が番犬のように、しかも囲いの中にいる羊を守って狼とたたかうことはまずない。

狼の食料となるネズミなどの小さな動物が冬眠した冬の草原では、狼の群れが羊や山羊といった小型家畜の群れを襲うことがよくあるが、馬や牛といった大型家畜の群れを襲うこともたびたびある。羊や山羊の場合は、ほとんど逃げることしかできないが、牛や馬の場合は、大人

が子どもを囲んで円を作り、種牛や種馬を中心とした力強い雄が円の外側で狼とたたかう。おそらく中国語版「馬頭琴」の整理者は、この話をヒントに、白い馬の賢さや主人との絆をより強調するために、このシーンを意図的に増やしたのであろう。

第3に、競馬大会が開かれた目的が不自然である。モンゴルでは、馬の長距離競争の乗り手は10歳前後の子どもであることが多い。モンゴルの馬の長距離競争は、日本の競馬と大きく異なる。広大な草原での20、30キロという長距離のコースが一般的である。だから、普通の大人が乗り手になると馬が持たない。

まれに大人が乗り手になることもあるが、現在、テレビや映画に出ている競馬の騎手を見ても分かるように、小柄で痩せている人でなければならない。要するに、これが「一等になったものは、殿様の娘と結婚させる」という部分に矛盾を感じる。乗り手が子どもの場合は、当然、結婚相手にならない。百歩譲って、乗り手が大人だったとしよう。だが、殿様が痩せ細った小柄の乗り手たちの中から娘の結婚相手を選ぶとは、普通は考えられない。これはおそらく、馬の長距離競走の1等になった乗り手は、西洋の神話などによく登場する白馬に乗った王子様のような格好よく、逞しい男であるというイメージを前提に、「一等になったものは、殿様の娘と結婚させる」となったと思われる。つまり、これは移植されたものであり、そこに「創作文学」の匂いがする。

第4に、大会が開かれた時期が不自然である。「馬頭琴」では、馬の長距離競争を開いた季節が「春」となっているが、モンゴルでは馬の長距離競争を夏季に行う。これは常識である。

モンゴル草原では、春には仔馬に焼印を押し、3歳の雄馬を去勢する大仕事がある。これが力仕事でもあるがゆえに、地域ぐるみで行うことが多く、若者が中心に活躍する。この時、元気な若者たちは遊びとして馬に乗って競争したりして長老に怒られることがよくある。というのは、厳しい冬を超えたばかりである上、牧草も少ないので、春季はすべての家畜が痩せ細っている。その時期に馬を走らせすぎると、馬の体内時計が狂ってしまい、脂肪を貯えることができなくなる。だから、モンゴルでは、春期に馬をあまり走らせてはいけないことになっている。

以上のように、中国語版「馬頭琴」やその翻訳とでも言うべき「スーホの白い馬」にはモンゴルの文化や習慣と矛盾する点が多くみられる。民話にはオーバーな表現が用いられることはよくあるが、だからといって、その民族の文化や習慣、歴史と矛盾することはあまりないだろう。その意味で中国語版「馬頭琴」には、確かに「創作文学」としての一面がある。ただ、民話をベースにしているゆえに、白い馬と主人の絆という、原話の「白い馬の物語」ならびに「馬頭琴の伝説」の本来の面影とでも言うべき文化的側面は活かされている。

なお、「スーホの白い馬」では、話の舞台を「中国の北の方、モンゴル」としているが、原話である中国語版「馬頭琴」では「チャハル草原」としている。また、「スーホの白い馬」では「殿様」としているが、「馬頭琴」では「王爺」になっている。

ところが、「馬頭琴」の舞台であるチャハル草原には世襲制爵位である「王様」、つまり「スーホの白い馬」でおなじみの殿様はいなかったのである。これが中国語版「馬頭琴」の最大のミスである。

なぜ、中国語版「馬頭琴」の舞台であるチャハル草原には世襲制爵位である「王様」はいなかったのか。それにはこ

のような歴史的背景がある。

１６９１年に清朝康熙帝が自ら取り仕切ったドロン・ノール会盟によってモンゴル人は清朝政権に臣従した。その会盟の際、康熙帝はモンゴル古来のノヤンやジョノンといった爵位を廃止し、モンゴル草原の王族に世襲制爵位である和碩親王（ホショイチンワン）、多羅郡王（トルイインジョウワン）、多羅貝勒（トルイインベール）、固山貝子（ホショーベース）、鎮国公（オルスイントクチェクン）、輔国公（オルスイントクチクン）を与えて統率を図った。この世襲制爵位は清朝宗室に準じるものであり、必ずチンギス・ハーンの直系子孫でなければならなかった。

その一方、清朝政権はチャハル草原の八つの旗（ホショー）（行政単位）において総管（アバン）、正参領（ジャラン）、副参領（イリクジャラン）、旗の管轄内におけるソムにおいて佐領（ジャングン）、驍騎校（フンド）、護軍校（ジョワンダ）による統率といった非世襲制役人による独特な行政仕組みを導入した。それは、チンギス・ハーンの22代目の子孫に当たる、モンゴル草原の最後の皇帝リグドン・ハーンが率いるチャハル・モンゴル人は、満洲人が勃興して清朝を建立しようとした時から徹底的に抵抗した上、清朝が成立した後も蜂起を繰り返してきたからである。

7　「馬頭琴」は何を訴えたかったのか？

すでに述べたように中国語版「馬頭琴」にはモンゴルの文化や習慣、歴史と矛盾する点も多くみられることから、中国語版「馬頭琴」自体が、モンゴル文化に関する断片的な知識に基づいて手を加えられた話であることが分かった。

つまり、「スーホの白い馬」の原典である中国語版「馬頭琴」は、モンゴルの伝統社会において、口承により代々伝えられてきた民話ではなく、モンゴルの民話をもとに作られた「創作」である。大塚勇三はこのことを充分に理解せず、中国語版「馬頭琴」を日本人向けにアレンジ・翻訳する形で「スーホの白い馬」を作成したのである。その意味において、日本で読まれている「スーホの白い馬」は「再再創作」であると言える。それを関係者らも気付かなかったようである。

では、中国語版「馬頭琴」は何を訴えたかったのか。１９５６年に刊行された『馬頭琴――内蒙古民間故事』の前書きに「本書はモンゴル民族の民間故事を集めたものである。これらの話の中では、モンゴル人同胞が受けている階級の圧迫や彼らの統治階級への憎しみや反抗が表現されている。本書に所収されている『馬頭琴』や『バイリン地域の力士』に、それがあらわれている」とある。

つまり、この話は「無産階級」のスーホと、「搾取階級」の殿様を対立させて描くことによって、殿様のような支配者・牧場主・富裕層は「搾取階級」であり、「悪」であるので絶対に倒さなければならないという階級闘争の思想のもとで創作された話である。ゆえに、「馬頭琴」ならびに「スーホの白い馬」では、「スーホという、まずしいひつじかいの少年がいました」「つれてこられた少年を見ると、まずしいみなりのひつじかいではありませんか」「なんだと、ただのひつじかいが……」（教科書）、または「なんだと！　いやしいひつじかいのくせに……」（絵本）というように、やたらにスーホが「貧しい羊飼い」であることが強調されている。これはつまり、スーホは「無産階級」であるということを強調している。一方、殿様はそのスーホを見下しているだけではなく、スーホの馬を奪い、しかも馬を残酷に殺す「悪い奴」として描かれている。これはつまり、殿様は「搾取階級」であるということを意味している。

結論を言うと、日本で読まれている「スーホの白い馬」は、単なる白馬と主人の間における愛と絆の物語などではなく、民間説話によくみられるような上流

階級と下流階級の対立の話でもない。この話は勧善懲悪をストーリーの骨子とし、無産階級のスーホを「善役」、有産階級の殿様を「悪役」として表現し、貧しい牧童の馬を奪い、しかも立派な白馬まで残酷に殺す殿様は支配者・富裕層、つまり「搾取階級」で「悪」である、したがって絶対に打倒しなければならないという、社会主義体制に宿る革命の意義や階級闘争的な視座に根差した特定の社会思想、政治思想によって生み出された話なのである。

8　なぜ階級闘争が必要だったのか？

では、なぜ階級闘争をする必要があったのか。ここでは、中国語版「馬頭琴」が創作された１９５０年代前後の内モンゴルの社会情勢をみることによって、その理由を探る。

当時、内モンゴルの最高指導者であったウランフーをはじめとする多くのモンゴル人政治家は、内モンゴルにおける民族構成や社会構造、階層構造、経済構造などは、漢人の地域と完全に異なるゆえに、プロレタリアートは存在しないという立場を取っており、内モンゴルにおいて中国共産党が行う土地政策を伴う階級闘争に反対だった。

このように内モンゴルの指導者らが、牧畜地域にはプロレタリアートは存在しないという立場を取っていたことの背後には、モンゴル牧畜民特有の生活スタイルがある。すなわち、遊牧という生活スタイルにより、使用人は広大な草原を家畜とともに移動する生活を送っていた。それは少なくとも、白馬に跨がって草原を自由に駆けるスーホのように精神的にも身体的にも縛りがなく、自由な生活を送っていたことを意味する。もちろん、モンゴル牧畜地域でも、支配者・牧場主・富裕層が多くの家畜を擁し、大勢の牧畜民を使用人として使ってはいたが、支配者・牧場主・富裕層も移動する生活を営んでいたので、使用人を毎日のように監視することは不可能だった。

また、当時の民衆は本当に心の底から殿様のような支配者・牧場主・富裕層らを憎んでいたのかといえば実はそうでもなかった。「スーホの白い馬」にあるように、馬の長距離競走の大会で優勝した者を殿様が花婿にするという話を聞いて、スーホに白い馬に乗って大会に出るようにすすめた周りのモンゴル人や、その話を聞いて迷わず大会に出場したスーホの行動には、殿様に対する憎しみというより、むしろ憧れがみられる。本当に両者の間に憎しみが存在していれば、スーホの周りの人々は、スーホに白い馬に乗って大会に出るようにすすめるわけがなく、スーホも大会に参加するはずがない。

当時、一部の支配階級は巨万の家畜を擁し、特権を握っていたことは確かであるが、彼らは地域の象徴としての存在でもあり、教育を受ける機会にも恵まれていたので、彼らの中に進歩的な考えを持つ者も多かった。なにより彼らの絶対的権力は外部からきた漢人たちにも有効であった。

草原で畑を耕す土地が欲しい漢人農民や、活動の基盤を拡大したい中国共産党にとって、このような支配階級は目障りだった。力で抑えることもできたが、そうすれば逆にモンゴル人の心をつかむことができなくなる。そこで考えたのは、あいつら（支配階級）のせいでお前らが貧しくなったなど、貧しいモンゴル人を煽り、彼らを使って支配階級を倒す方法である。そうすればモンゴル草原を「大衆」、つまり、侵入者である漢人農民にも平等に分け与えることができる。これがいわゆる土地改革を伴う階級闘争の狙いであった。そのために、民衆を煽る必

要があったし、自分たちがやっている「正義」をプロパガンダする必要もあった。

このような政治的・思想的イデオロギーの対立を背景にして、「馬頭琴」という話は、内モンゴルの草原のような牧畜地域にも、殿様のような支配者・牧場主・富裕層がいれば、スーホのような貧しい羊飼いがおり、階級は存在する、という社会主義的発想のもとで作られたものであった。

9　むすびにかえて

私は２０１６年に『「スーホの白い馬」の真実――モンゴル・中国・日本それぞれの姿』（風響社）を出版した。出版は大いに話題にはなったのだが、「スーホの白い馬」が来日してから約60年が経過していることもあって、多くの日本人の頭に刻み込まれた「スーホの白い馬」＝モンゴル民話という図式を崩すには至らなかった。

やはり整理者の塞野に直接会って話が聞きたい。そうした思いは強まるばかりだったが、その願いはやがてかなえられた。今年88歳を迎える塞野は、内モンゴルの地方の町でひっそりと暮らしており、めぐり会うことができたのだ。

２０１８年４月、私は塞野（本名「楊蔭林」１９３２年生まれ、漢族）を訪れた。その時、彼は中国語の「馬頭琴」について「この話は１９５１年頃、小学校で教員として働いていた時に採集し、１９５４年の年末頃、整理し、作品化して『馬頭琴』というタイトルを付けて『内蒙古日報』の副刊（文芸・学芸欄）に投稿した。そこでさらに加筆・修正されて掲載された」とオリジナルの話ではないことを認めた。

これによって「スーホの白い馬」は、伝統社会で成立して口承によって伝えられてきた、いわゆる民話ではなく、中華人民共和国の成立後、強いイデオロギーの影響の下でモンゴルの民話をもとに新たに創作された「新民話」であることが証明されたのだ。

最後に改めて強調しておきたいが、これは何かイデオロギーに基づいて書かれたものではなく、「スーホの白い馬」やその原話である中国語版「馬頭琴」の整理者や彼らの功績を否定することでもない。ましてや「スーホの白い馬」を教科書から削除しようとしていることではない。真実に基づいたドキュメンタリーを、草原で家畜を放牧しながら育った一人のモンゴル人研究者の視点から描いたものである。

（２０２０年２月６日・公開フォーラム）

筆者略歴（ミンガド　ボラグ）

中国内モンゴル自治区シリンゴル草原生まれ。１９９５年、教員養成学校であるシリンゴル盟蒙古師範学校を卒業。１９９９年に来日、日本語学校を経て２００１年に関西学院大学文学部に入学。２０１１年、関西学院大学教育学研究科博士課程後期課程修了。博士（教育学）。現在は非常勤講師・翻訳・通訳者として働く傍ら馬頭琴奏者としても活躍する。

著書に『「スーホの白い馬」の真実――モンゴル・中国・日本それぞれの姿』（風響社、２０１６年。第41回日本児童文学学会奨励賞受賞）、『草はらに葬られた記憶「日本特務」――日本人による「内モンゴル工作」とモンゴル人による「対日協力」の光と影』（関西学院大学出版会、２０１９年。第７回日本研究奨励賞受賞）などがある。そのほか論文・翻訳多数あり。

陶々俳壇（ようよう）

兼題「鰯」「服」

軍服のその後を思ふ敗戦日　松島二三四
◎明良　つらい経験。余人ならで。

母譲り手で裂き酢味噌で食ふ鰯　〃
◎正子　美味しそう！

武蔵野の淡き紅色鰯雲　橋本紅杓
◎田紀子　「武蔵野」の地名が効いている。武蔵野は文学の舞台にも使われ、芸術家に愛された戦後の歴史に欠かせない土地である。「淡き紅色」は読み手によって色々な解釈が可能であろう。

干し鰯口に広がる苦味かな　〃
○明良　丸かじりの味が良い。

母逝きて送る野辺道陽眩し　日野正子
◎正堂

ともに老い朝日に白き木槿かな　〃
○田紀子　作者は木槿と共にこの家で長い年月を過ごしている。「白」が優しく響く。

今日生きて触れる優しさ秋芝居　矢野一弥
◎若杉

天橋立冬支度して凛とあり　〃
○紅杓　松島・宮島と並び「天の橋立」は日本三景の一つで雪景色は絶景であるといわれる。

夏休み孫と会へずに過行くか　瀬﨑明良
○紅杓　新型コロナ禍のため楽しみにしていた孫と会えない。今後はwithコロナ時代。自粛も今年だけにとどめたいものだ。

いわしさへ刺身にされる世が来たり　〃
○若杉

卒寿へとたどりつきたり半夏生　伊藤正堂
○田紀子　「半夏生」という季語によって、何とか九十歳を迎えたことの苦労とまだまだ身内に宿る力強さその相反する二つの思いが窺われる。

茄子の木のバランス残し蔕を切る　〃
○正子　「親の意見と茄子の花は……」と言いますが実を成らすにはやはりコツが……。

どの家も鰯焼く香や漁夫の村　大内善一
○正堂

小鰯や持って行きなと漁婦の声　〃
○明良　昔の風景を思い出した。

秋風やああ満洲を過ぎきたる　佐藤若杉
○二三四　善隣協会ということで、満州の句があればできるだけいただきたいと思っています。西からの秋風はたしかに満州を、大陸を渡ってきた風でしょう。「故郷」を思う気持ちの深さはいかばかりか。深い感慨を垣間見る気持ちになりました。

洋服にチョビひげの父霊祭　〃
○田紀子　大正生まれのお父様が偲ばれます。

漁師らの語気の荒ぶり鰯引く　馬場由紀子
◎二三四　大群とも大漁とも言っていないのに、群れ来る鰯と戦うように船上の漁師たちが大きな声を掛け合い、膨らんだ重い網を引き上げる絵が浮かびます。波に踊る船の揺れさえ読む者の体に伝わってくるようです。その躍動感、生命感に打たれました。
◎善一　男も女も漁師たちが鰯の大漁の網を引く浜は、活気のある勢いある声が響く。
◎紅杓　イワシ漁は鮮度が重視される。漁船が猛スピードで小いわしを漁港に届けると息つく間もなく競りが始まるという。いわし漁船に同乗したのであろうか。

不自由な世を上り詰め牽牛花　〃
○二三四　朝顔がつるを伸ばすのは、不自由な世を上るためだったのか、という発見。

［推敲例］

山椒と鰯の梅煮の土用かな
美味しそうでコメントがたくさん寄せられた句です。ただ、「鰯」か「土用」かどちらかに焦点を当てた方が良さそうです。そこで、

山椒を効かす煮魚土用かな
煮魚に山椒効かし土用かな
と推敲。

尾竹一枝という女性（ひと）

大東文化大学名誉教授　渡邊澄子（会員）

雑誌『番紅花（サフラン）』の位相

皆さんには興味はおありにならないだろうと思われる私の大好きな女性（ひと）について書かせていただきます。『青鞜』という雑誌名とこの雑誌の創刊者・平塚らいてうについては周知のことでしょう。コンパクトな辞典にも載っている『青鞜』は一九一一（明治四四）年九月、女性の手になる初めての雑誌として発刊された、文芸作品の発表、新思想の紹介と共に婦人解放を叫んだ雑誌と書かれています。らいてうも人名事典類には『青鞜』の創刊者であり、女性解放、家族制度否定者として、戦後は平和運動に挺身した女性と位置づけられ高ランク扱いで記されていて、この構図がカノン化されています。誤りとは言えませんが真相は少し違います。『青鞜』は尾竹一枝の登場なしには以上のように位置づけられる雑誌にはならなかったのです。先走ることになりますが、世界的陶芸家として重要無形文化財保持者（人間国宝）、文化勲章受章者に富本憲吉がなったのは憲吉と結婚した一枝の力に負うところが大きいのですが、一枝を採りあげた辞典・事典は寡聞にして見当たりません。

知れば知るほど惹かれる一枝について本務の間を縫って二〇年にわたって調べたことの表層部分を書いただけでも一千枚になってしまったのを、削り削って約半量近くにして『青鞜の女・尾竹紅吉伝』（２００１・３、不二出版）として上梓してからもう二〇年も経ってしまいました。集めた資料はミカン箱六箱。恣意的にひと箱開けて見たら削った部分なのか前著には使っていなかった興味津々の資料（沢山の手紙や写真を含む）が出てきて、私のなかの熱気が炎を上げました。そこで、限られた紙幅内では何事も言い得ないかとは思いますが、こんな女性がいたということをうわ撫でにならざるを得ないとしても紹介したいのです。

◆　◆

順序として『青鞜』創刊者のらいてうについて簡略に述べる。本名平塚明（はる）（１８８６・２〜１９７１・５）は後に会計検査院次長になった高級官僚の父の三女として東京に生まれ、日本女子大学家政科卒後、禅修行と並行して成美女子英語学校に通い、生田長江によって開設された「閨秀文学会」に参加という当時においては最高の学歴をもつ。美しく利発な明に魅せられた講師の森田草平（東京帝

国大学卒、漱石の弟子）と塩原尾頭峠で「学歴ある男女の心中未遂事件」を起こし、スキャンダルとして世間を騒がせた。心中などは知識人のすることではないというのが当時の認識だった。世間の非難に怯まぬ人物を見込んでのことだろう、長江が明に女性による女性のための雑誌発刊を熱心に勧めたのだった。雑誌発行など興味も関心もなかった明に刊行を決意させたのは、その頃、平塚家に職探しのために居候していた姉の女子大での友人保持研（よし）がチャンス到来とばかり私が手伝うからと長江の提案に承諾を強く迫ったことによる。明にとっては心ならずの発刊（1911・9）だった。資金は明の婚資から母が百円出してくれた。文学を志す女性の発表の場の提供が目的で女性解放意識はなかったが、雑誌刊行は男のすることだったので珍しがられたものの歴史に燦たる地位を築くに至ったのは尾竹一枝入社による。そこで、尾竹一枝について略記したい。

一枝（1893・4～1966・9）は日本画家の雅号越堂（本名熊太郎）とウタ（富山藩の高級武士を出自）の長女として富山市で生まれた。祖父は新潟で紺屋業の傍ら絵師として土地の娘に押し絵を教えたりして親しまれていたが派手な女出入りで産を失い、義務教育制度が実施されたが授業料が払えず、子どもたちは小学校教育も受けていない。熊太郎は自由民権運動家として板垣退助の自由党で活動し、雅号「越堂」は伊藤博文の命名によるという。十七歳時から『絵入り新潟新聞』の挿絵を描いていたが富山に移住、兄を追った二弟と共に『富山日報』の連載小説の挿絵、売薬行商人の配りもの絵を描き、売薬絵師の中軸を三兄弟が担ったが、間もなく竹坡（本名染吉）・国観（本名亀吉）の二弟が東京に去ったため富山版画は越堂の独擅場となり、今なお、富山県史を代表する売薬史に越堂の名は欠かせない。越堂には発明癖があって、脳裏に閃くと本業そっちのけで寝食を忘れて熱中するので母は苦労の連続だったらしい。規模壮大な企画はすべて挫折し、成功例は上野公園にある現在の東京美術館だけだったようだ。三兄弟中、最も有名なのは無鑑査に推薦された竹坡だが、彼は四歳の頃から神童と言われ、国観も『小国民』主催の全国児童画で一等賞となり、三兄弟による『小国民』挿絵は鏑木清方を感心させたという。以前の目黒の雅叙園には百段階段前の大部屋「漁樵の間」は襖も天井もすべてが竹坡の絵になる竹坡の間で、広い本館玄関の天井絵も竹坡だった。廊下には巨大な国観の絵が飾られていた。日本画壇で横山大観と双璧をなした「尾竹三兄弟」だったが後には文展派によって憂き目をみることになった。大観の師でもある岡倉天心が学のないのが惜しいと言ったという。

一枝は「尾竹家に官僚と軍人はいない」を誇りとする家に、父や叔父の幼少時の苦節の過去を知ることもなくおおらかに育ち、夕陽丘高等女学校（第一期生。現夕陽丘高等学校）では校内一の人気者でエピソードに富む。父は一枝を「閨秀画家」にしようと下校後の課題としてその日の新聞の連載小説の挿絵のほかに「前賢故実」「信貴山縁起」「福富草紙」などの模写を命じた。日本画を好きになれない一枝は腹痛や怪我の仮病を口実にして、隠れて読書に熱中した少女だった。東京に行けば生きたい生き方が見いだせるという東京幻想を叔父竹坡の助言で果たしたが、東京美術学校（現東京芸術大学）はまだ女子に門戸を閉ざしていたので仕方なく、日本画専科だけの女子美術学校に寮生となって入学した。だが授業の古くささに耐えがたく、写生用に配られる薩摩芋や栗などを暖房用の火鉢で焼いて

食べてしまったり、林檎や梨は半分食べて立体感の出し方を考えたりといい加減に過ごしていたが、一枝が竹坡の姪と知った主任教師の川端玉章から特別扱いされて我慢ができなくなった時洋画科新設と聞き、転科の許しを願う手紙を父に出したその返事も来ないうちに寮監と喧嘩して退学してしまい、竹坡の家の家事手伝いの傍ら絵の勉強をするようになる。内弟子の何人かのなかには蕗谷虹児もいた。

『青鞜』との出会いは庭掃除をしていたところに来た郵便配達夫から渡された郵便物に叔母宛があって不思議に思い裏返して『青鞜』の文字に電光が走ったのだった。著名人の「夫人」宛の『青鞜』購読勧誘状だった。東京での友人、画家小林清親の娘で青鞜社社員になっていた仏英和高等女学校専攻科（現白百合学園中学校・高等学校）在学中の小林哥津の紹介でらいてうに会うとたちまちらいてうの魅力の虜になってしまった。らいてうに表紙絵を描いてみないかと言われて雀躍した一枝はその頃読んだ『白樺』掲載の南薫造の「私信往来」で制作欲に溢れながら方向が定まらず苦悩する芸術家が富本憲吉と知ると奈良まで会いに行く。この時描いた表紙絵「太陽と壺」は第二巻第四号の表紙を飾るが憲吉の手は入っていない。初対面のこの時、興奮したのは憲吉だった。美術学校在学中に約三年間、その間卒業も果たして、ヨーロッパ中心に世界各地を巡る私費留学によって近代を体験してきた憲吉にとって、帰った故郷の奈良安堵村の陋習囲繞の現実は息づまるものだった。そこに飛び込んできた垢抜けて天真爛漫な美感覚の鋭い紅吉（『青鞜』での呼称。べによしのつもりだったが「こうきち」に定着）に魅せられた憲吉はラブレターと読める手紙の矢を放ったが、らいてうに夢中の紅吉には通じない。その頃一家は大阪に居住していた。大阪で公演中だった「人形の家」の観劇評をらいてうから頼まれると、岩野泡鳴訳の本を買ってきて徹夜して読んで感動し、らいてうの指示にはなかったのに開演前の泡鳴と松井須磨子にインタビューをしている。泡鳴の須磨子溺愛ぶりが何気ない筆致で描かれる。舞台の須磨子の演技に興奮し、これも指示外だったが観客から感想を聞き回っている。夫を捨て、子まで残して家を出るなんてとんでもない、が大方の感想だったことに、日本の女はあれじゃダメだ、「人形の家」が言いたかったのは、女性は自身を高めて男性と対等の思慮、判断力を持たなければ真の結婚は得られぬということではないか、と書いている。ここには直覚的フェミニズムが見られるが、一九一二年、紅吉十九歳の時であることに感心させられる。須磨子と仲良しになる。

この年の四月、当時の代表的画会だった巽画会の第十二回巽画会展が上野竹ノ台陳列館で開催され、初めて描いた一枝の「陶器」が出品総数四百十一点中十三番で、金賞なしの三等賞銅牌を得て「天才少女画家出現」と新聞に大きく報じられたのだった。鏑木清方、山中敬中、今村紫紅、安田靫彦、上村松園らに竹坡、国観の加わる代表的画家十七名の審査員が作者名の伏せられた絵に点を入れその合計点でランクが決まる規則になっている。一枝が出品していることを知っている竹坡と国観は一枝には点を入れていない。兄弟や身内の出品作に点を入れないのは減点になって不公平だと越堂が『多津美』に書いている。妥当な論だろう。

五月十三日は紅吉の一枝にとって生涯忘れられない日だ。紅吉の受賞とズーデルマンの「故郷」にマグダの妹役で出演した林千歳を祝うミーティングが一枝の家で開かれ、会は盛り上がり泊まり込み

になった。この夜、らいてうがしかけた「同性の恋」に紅吉は舞い上がったのだ。隠すことを知らない紅吉は嬉しくて早速書いた。ふた月先の八月号にらいてうもはっきり「同性の恋」と書いている。舞い上がった紅吉はらいてうの力になりたい一心から、『青鞜』への広告を貰いにレストラン兼バー「メイゾン鴻の巣」に行って、店主が作ってくれたカクテルの美しさに飲んでもいないのに酔いしれたのだった。当時はまだ一般家庭はランプで、食器は瀬戸物だった。電気の光に煌めくガラスの細長い器に注がれた五色の酒の美しさに画家でもある紅吉は興奮した。男女交際のできる時代ではなかったが、そんなことに頓着しない一枝は「パンの会」『三田文学』『白樺』の人たちと恬淡と交流していて、その誰かに連れて行ってもらったことがあったのだろう。「鴻の巣」の広告は七、八月号に載っている。折も折、『青鞜』に好意的で物心両面から何かと援助してくれていた竹坡から、女性解放を目指すなら、暗闇で働かなければならない女性のいることも知るべきだと言われ、らいてうと中野初と三人で、竹坡の馴染みの吉原でも格式の高い妓楼「大文字楼」に竹坡のお膳だてであがり、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）付属女学校卒という花魁栄山とお寿司を食べながらお喋りして、隣室に一晩泊まったのだった。一枝に差別観は一切ないので浅草で白首と話したりもしたことが、誰が吹聴したのか尾ひれをつけて「赤や青の酒をのむ新しい女」「新しい女、男女同権を主張して吉原妓楼に遊興す」「白首と別懇な紅吉子」とジャーナリズムは競って書き立てた。青鞜社は女徳を汚す不良集団のレッテルを貼られて女学校は読書禁止としたが、面白いことに、やがて入社した理論家の上野葉子は女学校教師だったがむしろ生徒に購読を奨励した。その時の生徒に青鞜入社者が出ている。

紅吉に軽度の肺疾患がみつかり茅ヶ崎の南湖院に入院した。ここは国木田独歩終焉の地である。今は高齢者の介護施設「太陽の郷」になっているが、日本女子大学校医の高田畊安医師による独特の結核治療法で有名だった。紅吉の入院に付き添う形でらいてうが近くに部屋を借りて移ってきたので編輯室が茅ヶ崎に移転した形になり、紅吉を嬉しがらせた。らいてうが紅吉の部屋にいたそこに、見舞いを兼ねて編輯の打ち合わせに来た東雲堂の西村陽吉に見知らぬ若い男がついて来た。途中で偶然に出会って言葉を交わした画学生だが、評判のらいてうと紅吉への興味から願っての同行だったらしい。だが、らいてうと男が顔を合わせた瞬間の反応に敏感な紅吉は戦慄した。時経ずに男はやってきてらいてうの部屋に行き、らいてうは彼を泊めたのだ。紅吉の激憤に保持が、後に伊藤野枝が「あの時の平塚さんは本当にひどかった」と書いているが、紅吉にとっていかに残酷だったか。らいてう自身が紅吉との「同性の恋」について、「紅吉を自分の世界の中なるものにしやうとした私の抱擁と接吻がいかに烈しかつたか、私は知らぬ」などと「同性の恋」という用語を使って何度も書いているのに、二人が事実婚に入るとあの日のことを「同性の恋」なんかではなかった、それが証拠に今の奥村との生活がある、と書いている。卑怯ではないか。ついでに先走るが、奥村は画家として大成せず、終生敬愛し続けた一枝によってらいてうはどれほど援けられたか挙げたらキリがない。戦時下では真っ先に疎開したことを先見の明と誇り、皇室礼賛、戦意昂揚、優性論など戦急迎合の発言が多く見られるが、一枝には一切ない。戦後は疎開地に居続けるつもりだったのを、一枝が新しい時代の先頭にたつべき

と引っ張りだし、栄光の晩年を持てたのに、一枝の死に際しての悼辞は情のこもらぬそっけないものだった。らいてうについては賛辞ばかりでそのような面に目をとめる論は見いだせない。

退院後、新しい表紙絵を描いてこなければらいてうの部屋の敷居は跨がせないと言われ、近代の息吹を吸い込みたくて憲吉を再訪。喜んだのは憲吉だった。だが、らいてう一辺倒の一枝には通じない。この時描いた表紙絵には憲吉の手が入っている。三巻七号から十一号まで表紙を飾った「アダムとイブ」である。ジャーナリズムが揶揄的、批判的に騒ぎ立てる「新しい女」に社員たちが紅吉を刺す目の痛さに居たたまれなくなった紅吉は退社を決意する。二巻十一号には紅吉の退社の弁とも言える「群衆のなかに交つてから」と十四連からなる詩「冷たき魔物」、最後の編輯としての「編輯室より」はどれも悲痛の思いが溢れていて感動を呼ぶ。「新しい女」の元凶紅吉が去っても青鞜攻撃は止まず、そこで初めて社員たちは目覚めて敵の正体を知ることになる。らいてうの打って出た「自分は新しい女である」（1913・1、『中央公論』）は歴史的発言といえる。

仲間からの非難の辛さに耐えながら、一枝は生田長江から提供された長江が書斎にしていた大部屋で第十三回巽画会展出品作を描いていた。五六五点出品で金賞なし、二等二人に父越堂が受賞し、一枝の六曲屏風絵「枇杷の実」は一ランク下がったが褒状一等で続けての受賞に、伏せられていた名が明かされて「新しい女」とわかると沸き立った。巽画会の機関誌『多津美』は毎号のように一枝と三兄弟の記事を載せ、画展史上初の総見が行われ、新聞記者、女優、長江はじめ妻子同伴の坪内逍遙までの参観に上野の山は賑わったと書いている。二十歳になったばかりで画歴も浅いのに好きでもない日本画で連年受賞は見事というべきだろう。この絵にまつわるエピソードとして、長期滞在の長江宅に家からの使いで一枝の妹の福美が頻繁に来ていたが、同居者兼書生だった佐藤春夫が見初め、春夫の生涯の傑作ともいわれる「泉と少女」「情痴録秘抄」「ためいき」『詩文半生記』などに描かれた「プラトニックラブによりて心身甚だしく病めり。慢性の不眠に罹」ったというほどの恋をし、結婚を願ったが、懐手して歩くような男（当時の一般の文学者観）に娘はやれぬと父の反対で結婚できず、福美は画家安宅安五郎と結婚したがその長女美穂は森鷗外の末子類と結婚している。最近、朝井まかてによる『類』が刊行され話題をよんでいる。

マスコミの寵児になった一枝は、天真爛漫な人柄からも記者たちに好かれて随筆や、旅行記の依頼などが来るようになり、青鞜社で非難された悔しさから自ら雑誌創刊を思い立つ。資金は「枇杷の実」が審査員の山田敬中の倍額の破格値で売れた三百円が当てられた。『青鞜』はらいてうの婚資から母が出してくれた百円であり、長谷川時雨主宰の『女人芸術』は時雨の事実婚の夫で売れっ子作家三上於菟吉が出していたことを思い合わせると、二十歳の女性の自力による雑誌創刊は評価されていいだろう。

すっかり仲良しになっていた須磨子の楽屋で決まった誌名『番紅花』は華々しく産声を上げたが、花火のように輝いたものの呆気なく六号で自然廃刊されてしまった。表紙絵を富本憲吉に依頼したことにより、憲吉にとって三度目の正直として恋が炎を上げて結婚に結果してしまったからだ。

『番紅花』創刊号は一九一四年三月一

日発行。月刊。菊版。編輯所は東京市下谷区根岸八三番地（一枝の部屋）。発行は東雲堂書店。創刊号は二二九頁。平均一七〇頁。定価三〇銭。ちなみに『青鞜』創刊号は一三四頁。定価二五銭＋郵税一銭五厘。一枝の人気だろうが巻末の広告は創刊号二四頁、二号は二六頁と毎号多い。創刊号と二号の表紙絵「壺」、裏絵「女の顔」は憲吉、創刊号の扉絵・カットは小林徳三郎、二号以後のサフランを図案化したカットは恩地孝四郎。三号以後はぐんと華やかになり、憲吉の自画自彫の表紙絵「人魚の喜びと花をまつる蒲公英の葉」、扉絵は「歌ひかつ昇りゆく雲雀と咲かぬタンポポ」。蒲公英の花は陽の出で開く。それまでは花弁を閉じて寝ているという。早起きして実見したらほんとだった。彫りは一枝も手伝って血を流したりしている。正式同人とは言えぬが当初の仲間は一枝中心に神近市子・小笠原貞子・小林哥津・原信子・松井須磨子の六人。仲間は急速に増えた。執筆者はほかに森林太郎（鷗外）・武者小路実篤・蘭五三子・八木麗（うらら）・八木さわ（麗の妹）・菅原和子・阿部次郎・青山（後の山川）菊栄・伊達虫子（岡田八千代）・尾竹ふくみ（一枝の妹）・佐藤春夫・田村とし（俊子）・與謝野晶子・浅井三ツ井（一枝の妹）・小山内薫・松居松葉・小沢愛圀と多彩である。内容は小説・戯曲・詩・短歌・随筆・評論・翻訳と多岐にわたり、演劇面においては演劇誌の要素を併せ持ち、演劇史の資料として有効。豊富な舞台や役者の写真が楽しい。『青鞜』と『女人芸術』の橋渡し的性格に『白樺』の要素を備えた楽しい雑誌だが、一枝の画家への道は途絶えた。

編輯過程、同人達の動静を「編輯室より」が生き生きと伝えている。全号への鷗外の協力ぶりは際立つがその経緯は一枝の書いた「編輯室より」と「鷗外日記」を合わせ読むとわかる。何故漱石でなく鷗外だったのか。『スバル』に載った森しげの「破瀾」を読んでのことだろうか。物怖じしない一枝は未知の鷗外に手紙を出した。その日のうちに明日、陸軍省の自室で待つと地図まで添えた返事が来て翌日、神近と一緒に行き、雑誌創刊の知識と寄稿を依頼する。八日後に創刊を祝った「サフラン」、その翌日「海外通信」が届いた。公務多忙の時期だったのに最後まで寄稿し続けている。創刊号の巻頭を飾った小品「サフラン」は幼時の思い出として、父に聞いたら薬箪笥の抽出からだしてみせてくれたが「干物」で生の花は父も見たことがないと言う。去年、たまたま花屋で見つけ、球根二つ買って帰ったがそのまま忘れて水もやらなかったのに青々と叢がりでていて生命力の強さに驚嘆したという話である。他に翻訳を二号に「毫光」、五号に戯曲「忘れてきたシルクハット」のほかに五号を除く全号に署名「ＯＰＱ」で、海外の傑出した女性やその運動などの他ファッションまでが紹介された抜群の面白さだが啓蒙的でもある「海外通信」を寄稿している。一枝との交流、『番紅花』関与は鷗外文学に転機をもたらしている。その頃博文館から原稿依頼があって読んでいた若山甲蔵の『安井息軒先生』から妻の佐代を主人公に据えた「安井夫人」を書くことになる。鷗外研究者は佐代を良妻賢妻と位置づけているようだが、私は鷗外文学における「歴史離れ」とそれまで描いてきた女性像とは異なり自我を持った女性像造型の始まりの作とみたい（拙著『女々しい漱石、雄々しい鷗外』世界思想社、一九九六・一参照）。鷗外文学に一枝と『番紅花』の果たした功績は大きい。

創刊号掲載の武者小路の「美術に就ての雑感」にも教えられるが、原信子の「プチニー歌劇」と「今日の歌劇」、松井

須磨子の「復活劇の梗概」が興味深い。カチューシャの歌は津々浦々まで響き渡った。秋田の在の荒川鉱山の長屋生まれの作家松田解子が子どものころ学校から皆で大声で歌いながら帰ったので今でも歌えると歌ってくれたことが思い出される。須磨子は四号に「最近の不平」を載せている。抱月の後を追って自裁したのは一九一九年だが、生前一冊の随筆集（1914・7、新潮社）を残している。華やかに桜を散らした赤いカバーが哀しみを新たにするが、抱月の「序に代へて」には、「男性的力張の素描に女性的婉柔の陰をつけたのが女史の芸術であ」り、「舞台の上に漲らす熱力と其の鮮明にして強烈な表情とは、今の日本の女性が達し得る限域を超えてゐる」の一節がある。この本には沢山の舞台写真が載っていて興味を一段と深めているが、「最近の不平」や「感想」は同感される切実さで胸が痛む。即ち、「同じ人間で有りながら、男には許されて女には許されないと言ふのはをかしいぢやありませんか」、『女の癖に』といふ女子軽蔑の思想から抜けきつて居ない」からで、「女には自分等男よりも遙かに多い負擔をしよわせるのが当然のやう」な不平等に女は「だまつてゐなくちゃならないでせうか」、「私はすべて私のする事を男として考へて貰ひたいと思います。男と同じ自由を與へ同じ尊敬を払つて貰ひたい」と。直覚的フェミニズムが息づいていて感動させられる。

神近市子は毎号小説を発表しているが市子に小説は不向きだろう。創刊号の上下構成の冗長な「序の幕」は、津田塾で青鞜社員であることが知れて学長に呼び出されて青鞜の退社を命じられ、卒業後、青森の女学校に飛ばされる話で、『青鞜』への教育界の反応に驚かされる。面白いのは四号に発表の「N氏のマニュスクリプト」で、赴任先の青森の女学校で青鞜社員であることが知れて免職になり、東京に戻ることになる私小説だが、時代を知る上での好個の作になっている。一枝の紹介で東京日日新聞に入社し、敏腕記者として活躍した後政治家として功績を残していることは周知のことだろう。

一枝は創刊号に詩「私の命」と「夜の葡萄樹の蔭に」と手紙文体の「自分の生活」を載せている。「私の命」に謳われる太陽は、長女の名に「陽」とつけたことが示すが一枝にとって成長したい意欲を表す象徴語なのだ。手紙文体の作品は「同性の恋」が踏みにじられたことによる愛についての思考になっている。一枝は「編集室より」が一番面白い。一枝は「K・O」や「リッスラー」名で海外通信も書いているがネタ元はどこだろうか。妹の福美（署名はふくみ）は創刊号に短歌一六首、二、四号に小説「さくらの花」、五号に「なげき」を発表している。紹介するほどの筋はないが文才を感じさせる。前者は小間使いだったおしほと商売の見習いに来ていた朝治との恋が家制度に阻まれて引き剥がされたあわれを桜をみるたびに思い出されるというもの、後者はおふみさんには結婚したい人がいたのに家長命令で嫌な人と無理矢理結婚させられそうになり自裁する話。女が自由に生きられなかった時代の告発にもなっている。福美が結婚して去った後にその妹の三ツ井が後を受けて四号に詩「西班牙（スペイン）物語ルイザ姫様の詩」、六号に「果物うりの若者のうた」と「白い鳩の死」を載せている。三ツ井の人柄そのままの優しい詩だ。三ツ井には妻を失った後の有島武郎に愛された物語がある。残されているものだけでも有島の三ツ井宛書簡は五九通に及ぶ。有島の弟の佐藤隆三宅で開催された有島の『生れ出づる悩み』のモデルの漁師画家木田金次郎展で受付と雑務を手伝い、木田の絵を一枚買ったことか

ら木田と親しくなり、結婚話も出たが、結局、父に従って日本画家の野口謙次郎と結婚した。野口は東京美術学校卒で帝国美術院展に毎回入選し、特選も得ている風景画を得意としたが、日本画に洋画的色彩技法を取り入れた最初の人だった。三ツ井は何種もの女性・少女雑誌の挿絵や口絵を描いているが、小説も書いている。廃刊が残念。

小林哥津は創刊号に戯曲「春のすゑ」、小説を三号に「苦労」、六号に「浮世」を発表している。下町娘の粋な風情の描写はいかにも哥津らしい。「浮世」は友人宛の手紙形式だが、東京の下町言葉の「久しく」が「しさしく」のリアルが笑いを誘う。水商売のふさを客の孝三郎が見初めて結婚したものの姑にいびられて離婚させられ、新しい妻に諾々の男の情けなさを愚痴ったものだが、「お亭主があつても、ないやうなみじめなおかみさんなら、ふつふついやに候」が利いている。小笠原貞は創刊号に「さふらんの香」、二号に「姉と妹」の小説を発表。前者は結婚して遠隔地に行った文子が出産のため帰ってきたが蒲柳の質らしく、苦しみ産んだ赤子は元気で一日一日成長し、その傍若無人ぶりに母親の文子は追いつけない。姑と「嫂」の溺愛を淋しく眺めるしかない。母から医者の薬よりもとサフランを渡される。サフランが薬だなんて知らなかった文子はどうぞ効きますようにと祈る思いで香をかいだ、という平凡な作。「嫂」の夫の兄も、子の父の夫も姿を見せないのは不自然。後者は上下構成で上は両親を亡くした姉妹の姉の多鶴子は三十を過ぎようとしているが浮いた話一つなく必死に働いて妹の世話をしてきたので、恋愛にうつつを抜かす妹が許せない。官庁から洋行の話があってそれは彼女の夢でもあったが、時を同じくして応諾したい条件のいい縁談がくる。悩んだ末洋行をとる。大勢の見送り人と別れを惜しみ、銅鑼が鳴る。そこに飛び込んできた久しぶりの妹に、恋愛なんかより勉強せよを別れの言葉にするが、船が出て、一人になると、妹への態度は正しかっただろうか、と悔やまれる。下は妹美代子の視点。姉から受けた恩義は感謝しきれないが、勉強勉強で恋人と引き剥がされたその姉はもういない。彼と一緒にどんな苦しみにも耐えて立派に生きて行こうと決意すると嬉しくなって血がのぼる、と言う平凡な作。

八木麗・さわ姉妹はほとんどの号に登場している。創刊号には「二人の歌」として二人の短歌を。二号にはさわが詩「影のかげ」、麗は「『ピエールとジヤン』を読みて」を。仏文学者で幾つもの名作の翻訳をしているさわの詩はフランスの香がする。麗の評論は本格的モーパッサン論だ。しかも自分の言葉で書いていて、私も論じてみたくなった。そう思わせる論なのだ。さわの三号掲載の「断章」は思わず口ずさみたくなる詩だ。四号にはさわが短詩五編、麗が小説「別れの手紙」を発表。くどいが面白い。進学のために来た伯父の家で出会った東北大生との恋は真剣だが伯父の娘が結婚相手にされていて彼は承諾したが「私」は反対。そこにきた私の結婚話に気が進まないが親のため家のためと諦めて一度は承諾したものの考えた末、自己の尊厳を守るために拒否して、八丈島で教師として一人で生きる道を選ぶ。「私は全く新しい私になって、新しい生活に入」る覚悟で終わる。甘ったるいが当時では先進的。五号にさわの長詩「甘き呪」、六号に長詩「リラの香」。麗の六号発表の小説「C夫人の或る朝」は読み応えがあって廃刊が惜しまれる。最終号になってしまったこの号には與謝野晶子の詩「蝉」、長谷川時雨の戯曲「月に住む」、珍しい手法による伊達虫子

（岡田八千代）の「或る夫人に」は「つゞく」とあって残念。五号は演劇中心の号。小山内薫の「レッシング座で見た芝居」、松居松葉の「女優片々草」、小澤愛圀の「人形芝居について」、原信子の「オッフエンバツハ」と続き、世界の名優の写真が十葉も添えられていて楽しい。

紙幅を失ったが割愛できないのは青山（後の山川）菊栄の翻訳である。コロレンコの「マカールの夢」（二号）と小説「盲楽師」（四、五、六号）の面白さは抜群だが、注目されるのはカーペンターの「中性論」（三、四、五号）で、「同性論」にも触れている。ほんの少しだけ紹介する。「あらゆる人間は男女の両要素を有つてゐる。たゞ常態（ノーマル）の人の場合」は「一方の要素が他の要素よりも大なる発達を遂げてゐる」ということで、「異性間の恋愛には『種族の蕃殖』なる特殊の任務」があるが「同性の恋には社会的の勇烈な事業と精神的子孫の生殖――即ち吾等及社会に変化を来す哲学的思想及理想を生む独特の職分」がある等々、蘊蓄に飛んだ論が展開されている。中性や同性愛を穢らわしいなどとみる視点は微塵もなく、むしろ相手を思いやれ、相互成長できる関係としている。私たちはその例証を幾つも知っている。宮本百合子と湯浅芳子については私は湯浅から具体的に聞いている。矢田津世子のコントから芸術的完成度の高い純文学作家への成長には大谷藤子がいたし、吉屋信子と門馬千代も「どちらかがどちらかを犠牲にすることのない関係」だった。フェミニズムに通ずる。一九一四年という時代だったことを考えるとカーペンターにも、訳者青山菊栄にも、これを三号にわたって採りあげた『番紅花』にもその先見性に感動させられる。

いわゆる大正デモクラシー（１９１１～１９３１年）の時期に創刊された女性雑誌は二一四種でそのうち女性の手による雑誌は三三種という（『大正期の女性雑誌』近代女性文化史研究会、大空社、２０１６・２　新装普及版）が、三三種のほとんどが運動体の機関誌であり、『番紅花』は文字通り資金からすべてが女性の手作りなのに三三種から排除されている。何故か。『番紅花』は女性雑誌だが男性を排除していない。文学と演劇をターゲットとしているが世界各国の女性解放やその運動状況まで視野広く、他に見られぬ差別のない雑誌である。最終号になってしまった六号（八月号）の「編輯室より」は一枝が奈良に行ってしまっていたので八木麗が、九月号はもっといいものにしたい、この号に載るはずだった尾竹さんの「人形を買ふまでの恋」も次号まで待って貰いたい、などとあって予想外の突然の廃刊だったことがわかる。憲吉との結婚が決まってしまったからで、一枝の責任は重い。一方での驚嘆は二十歳で一九一四年のこの雑誌に一枝は原稿の擱筆日をすべて西暦で記していることである。元号は「君主」の時間に民衆を従わせる制度であり、中国に倣って「大化」に始まる前近代の遺物で、主権在民の民主主義国となった現在では使うべきではないのに公用語にまで使われているのは憲法違反に当たるが、まだそのような視点のなかった国民は皇国民だった時代に西暦使用で一貫している一枝の感覚には脱帽される。ついでに言うのだが、結婚後、一枝は夫の憲吉を他者との会話その他の中で終生一度も「主人」を使っていない。夫婦は対等の考えによる。

『番紅花』廃刊後の憲吉との生活にこそ、一枝という女性の真の新しさとそれに比例しての喜怒哀楽、とりわけ屈辱的苦悩への悩みなど本当の一枝物語は始まるのだが、今はそこを語れる機会の到来を待ちたい。

エッセイ

新橋界隈の変遷④

瀬﨑　明（会員）

徳川時代、江戸城の外堀に通じる新橋は舟運にも恵まれて商いの要衝としての役を担っていた。代が明治に替わってからは外国貿易が盛んになり、異文化の移入地としていっそうの隆盛を誇った。ここに水運をもたらす荒川は江戸川、渡良瀬川、利根川などと流れを併せて関東平野を潤してきた。奥秩父に源を発した荒川は岩淵赤羽で隅田川に分かれる。その分岐点から20数㎞下流の河口に新橋・汐留がある。江戸期には隅田川の下流は大川と呼ばれ、池波正太郎などの時代小説ではその名が頻繁に登場する。舟運の便が良い隅田川一帯は江戸期より賑わうところであった。しかし、荒川は名にし負う暴れ川であり昔より洪水が絶えない。令和元年10月22日の今上天皇パレードの延期をもたらせた台風19号は、強風と同時に異常降雨による河川の氾濫を各所で引き起こし、被災地の苦難は如何ばかりかと心が痛む。昔より水害に悩まされている隅田川流域だったが幸いにして氾濫の難を逃れた。過去に例を見ない2倍、3倍の想定外の降雨にさらされてなお洪水発生を逃れたのは、僥倖だけでなく長年の治水事業の成果もある。隅田川が氾濫すると銀座、新橋だけでなく大手町を含めた首都中枢が水に浸かり、首都機能が長期にわたり麻痺状態になる恐れがあった。

江戸時代から現在に至るまで、荒川水系の治水事業は巨額の投資がなされている。これも首都の中心地を災害より守る施策であり、我々協会員を含めた地域住民の安全にもつながっている。治水豊かな新橋界隈で多くの有名人が誕生しているが、文人だけでも数えきれないほどである。明治に生まれて早世した著名な作家に目を向けると、内幸町で生まれた樋口一葉、築地生まれの芥川龍之介、芝大門生まれの尾崎紅葉などがいる。樋口一葉は紙幣の肖像画となった女性の2人目だが、最初の女性肖像画は神功皇后であり実在すら定かではない。

一葉が近代女性として最初に5千円札の肖像画となり、その後に津田梅子が選ばれたのはお札ではあるが女性登用の象徴のようで喜ばしい感がする。しかし、いずれも5千円であることにいささかの疑問が残る。紙幣になった一葉であるがお金の苦労は絶えなかったようである。官吏であった父を失い、兄は寄り付かず母妹を抱えた一家の家長として商売にも手を染めたが上手くゆかず、小説『たけくらべ』で森鷗外が絶賛するなどの名声を得たが結核のため24歳で早世している。

紙幣をテーマとしたが、肖像とは関係ないにしても金を主題にした尾崎紅葉の代表作『金色夜叉』は外せない小説である。金を敵とした主人公の「今月今夜のこの月……」のセリフや熱海海岸の「お宮の松」は知らぬ人はいないほどである。紅葉は大学時代より読売新聞に勤め、大学を中退し読売新聞の作家として名を挙げ文壇の重鎮として活躍したが、胃癌により37歳で世を去っている。

芥川龍之介と紙幣のつながりだが、いささかこじ付けである。龍之介の出生地・築地は父・新原敏三が支配人を務めた牛乳販売業耕牧舎地であった。この事業は新1万円札の肖像となる渋沢栄一のものであった。

編・訳　上松玲子

大学受験にまつわる詐欺

教育部は大学受験関連の典型的詐欺5例について発表し騙されないよう呼びかけた。

まず、補欠合格詐欺。定員割れの大学があると持ち掛け、大学と特別な関係があるなどといい、大学の自主募集枠（内部指標）を買わないかと持ち掛ける。大学入試は厳密に全国統一選抜が行われており、金で良い大学や学部、統一試験の点数不足分を買えるとか、内部指標云々はすべて詐欺であると教育部と公安部は断言する。正規の選抜には保証金や入学許可費などどんな付加費用も発生しないという。

次に、最近の詐欺師にはＩＴ通を装いハッキングで成績を改ざんできると言う者がいる。教育、公安部門は、これも詐欺だと断言する。入試情報管理ネットワークは外部から侵入できる設計ではないからだ。事前採点や偽の選抜サイトなどの詐欺もある。権威ある部門が運営する正式な情報源であることを確認すること、特に個人情報や銀行口座番号などの入力を要求されたときは慎重に対処することが肝要だ。

さらに、統一試験後の出願にあたり、受験生たちは指南書や有料のアプリなど、いわゆる出願のプロを盲目的に信じてしまうが、ここにも危険が潜む。教育部は、各地の公式試験運営団体や各大学の相談会やネット相談はすべて無料なので、受験生にはなるべく意中の大学に直接相談するよう呼び掛けている。

また、架空の大学いわゆる「野鶏大学」も詐欺師の常套手段だ。『人民日報』は２０１６年と２０１８年に架空大学リストを公表したが、２０１８年は３９２か所もあった。２０２０年現在募集資格のある高等教育機関は３００５か所で、その名簿は教育部の公式サイトで確認してほしいと教育部は言う。

最後に、社会人受験、自主学習受験、リモート教育、通信大学などの学生と、全国統一試験により選抜された大学生では、卒業後国家が認定する学歴が大きく違うことをしっかりと把握しておくべきだ。全日制の普通大学志望なのにだまされて、卒業証書を見て気がついたということもあるそうだ。

（『羊城晩報』２０２０年８月11日）

先生への感謝に宴会は必要か

先頃、湖北省黄岡市紀律検査観察機関は党員や幹部による規則に反した「昇学宴」（進学祝いの宴会）を摘発した。報告では、高校、大学受験の重要な時期である今、各級の党委員会は所属の党員、幹部および公職者の子女の進学状況を調査し、対象者には講話を行い、「昇学宴」「謝師宴」の防止と飲食の無駄の防止に努めるよう呼び掛けている。

教師を尊敬し、教育を重んじるという「尊師重教」は社会の共通認識となっているが、一部の保護者は宴会に教師を招けば、教師を尊敬したことになると単純化し、「尊師重教」を歪曲している。一方、よい教師は自己の精神世界と職業規範を守る模範を示し、学生を導くものである。

豪華な「謝師宴」は「尊師重教」の観念を低俗化させ、単純化、物質化し、教師の品格を貶めるものだ。

（『光明日報』２０２０年８月26日）

新たな教育格差の懸念

先頃中国教育科学研究院が行った大規模な調査で、我が国のオンライン教育は東部、中部、西部で明確な格差があることが明らかになった。インターネット通信回線の停滞、切断、家庭の設備の不足、教師のＩＴ能力の欠如などが西部地区の学校の弱

点で、オンライン教育活用で地域間の教育格差をなくしたいという望みはますます前途多難なものになっている。専門家はこれを教育「鴻溝」、デジタル「鴻溝」と呼んで憂慮している。

問題解決には3つの壁がある。「使えない」「使いたくない」「使いこなせない」という問題だ。

学校や家庭に必要な設備、優れたデジタル教案がなく、教師能力もないので「使えない」のだ。さらに、オンライン教育に対する認識に問題がある。多くの教師が「面倒」「無駄な苦労」という認識である。「使いたくない」という態度を改めなければ、技術習得意欲もわかず「使いこなせる」わけがない。

関係部門は早急に基本的な運用方法を研究、策定して、教師を指導しなければならない。3つの問題を解決しなければ教育の均衡的な発展は望めない。

（『光明日報』2020年8月28日）

その就職率は正しいのか

「仕事が見つからないなら、『自由業』と記入しなさい」「調査には、『個人メディア』（原文：自媒体）と答えなさい」。教育部門が禁止命令を出しているにもかかわらず、大学が硬軟取り混ぜた対応で卒業証書と引換えに学生に就職証明を出させ、就職率を水増ししていることが、メディアの調査で判明した。

「自由業」や「個人メディア」が就職率を支える主力になったのは、今年教育部がインターネット運営業者、公式ブログ開設者、eスポーツ選手を自由業として就業統計に入れるよう明確に指示したことによるかもしれない。だが、これは社会の変化に合わせた調整で、実情に基づいた問題解決姿勢が大前提だ。

就職偽装は以前からあって、すでに2013年新華ネットで、様々な手が報道されている。

広州市の某大学の環境科学専攻の卒業生の1人は、「自由業」にされたとき、指導員にこう言われたそうだ。「これは、就職率が低いために大学への志願者が減らないようにするためだ」。

しかし、虚偽のデータに参考の価値はない。受験生はもちろん、教育管理部門、社会も間違った方向に導かれるだけだ。各大学が当然のように水増しを行い、世間でそれが暗黙の了解になってしまったら就職率の統計など何の意味も持たなくなる。

今年は新型感染症の世界的流行と国際情勢の変化により、多くの企業が採用を縮小することは誰もが知っており、メディアも就活に苦戦する学生の姿を伝えている。仮に大学にとって理想の数字が出なくても、理解は得られるはずだ。見せかけの数字にこだわるべきではない。

（『澎湃新聞』2020年9月6日）

落下物の責任は

2016年11月、四川省遂寧市で生後1年に満たない女児が、頭に空から降ってきた鉄の球をうけ、亡くなった。2020年8月24日、高所からの飛来物による死亡事故に関する遂寧市初の判決が下った。投げた者が見つからない中で現場の集合住宅の全戸の住人が一律に賠償することになったのだ。

遂寧市船山区の人民法院は審理の過程で、該当の建物の所有者は1階の管理者も含めて加害者となった可能性があり、調査の結果当時空き家だった住居以外の住人は1戸あたり3000元賠償するべきだと認定した。

これは『侵権責任法』に基づき、該当住居の居住者または所有者が自己に過失がないことを証明しない限り、過失ありと推定されるという原則が適用されたのだ。被害者保護の観点からも、法律は弱者を守り、双方の利益のバランスを考慮するものである以上、加害者の可能性がある全員に損失を分担させることが、被害者の慰めになり、加害者に対する警告や教育になると判断したのである。

いずれ『民法典』実施後は救済措置として、共同賠償後、実際の加害者に賠償を求められるようになる。公安部門は可能な限り真の加害者究明、あるいは範囲を狭めるべく捜査することが規定されるようになる。

（『総合封面新聞』『央視新聞』2020年9月6日）

協会通信

◆第7回理事会の議題（9月17日開催）

今月は下記内容で審議を行った。

●確認事項

7／16 第6回理事会議事録（案）が確認された。

●決議事項

協力会員から正会員への資格変更が決議された（志村照彦氏）。

●討議、報告事項

1、資金繰りについて（定例報告）

2、各常任委員会報告

3、事務局報告

4、矢野会長「善隣特別号」に関して

「善隣」特別号（9月号）が配布されてから初めての理事会なので、改めて会長が寄稿内容の真意と補足説明を行った。これに対し、各理事から様々な意見が表明されたが、今後もさらに討議が必要であるとの共通認識が確認された。

（事務局長　藤沼弘一）

会員だより

◎新会員〈正会員〉

志村照彦氏（協力会員から資格変更）

◎訃報

小沼伸二氏（88歳）
令和2年7月19日逝去
謹んで哀悼の意を表します

同好会だより

本年12月末まで当館での活動はお休みします。

※「自宅で俳句会」への投句募集

「陶々俳壇」では、会員・誌友の方からの投句を募集します。自宅にいながら俳句会を楽しみましょう。

【進め方】選者の馬場由紀子先生を中心に、その月の兼題と自由題合わせて5句を作り投句します。集まった全部の句から7句を選びそのうち1句を各自の特選とします。その際、互いの句に選句の理由や感じたことをコメントします。馬場先生が選句結果をまとめてくださり各自に送ります。その内容は「陶々俳壇」に発表されます。

ご興味がある方は、事務局（福冨）までご連絡ください。

みんなの写真館

亀の甲羅干し（表紙）

本年5月に満77歳となり、何か1つやってみようと思い立ち、7の数字にちなんで、1日7000歩の散策を続けてみようと考えた。8月1日に第1目標の連続77日を達成、9月23日に連続130日を通過し、今なお更新中。主な散歩コースは、自宅からほど近い千葉大学のキャンパス内である。その工学部の道路沿いに10メートル四方くらいの池があり、亀が20匹くらいは生息している。時々ではあるが、晴れた日にはご覧のように所狭しと甲羅干しをしている姿が見受けられる。

（藤沼弘一）

日中国交正常化48周年（表4）

日中国交正常化48周年を迎え、当時の写真があり回顧しました。当時、北京に日本の駐在事務所は認められていませんが、旅行者の身分で特別に滞在ビザが許されていました。

ある日、中国国際貿易促進委員会より、近々日本政府代表が国交正常化事前交渉のため、初めて北京に来られるので空港で出迎えるよう連絡があり、いよいよ日中貿易は障害なくできる日が来ると、友好商社の仲間と期待を膨らませていました。日本政府代表の全日空チャーター機が、初めて北京空港に降り立ち、機影を見て胸が熱くなる思いでした。その時撮った貴重な写真です。

中国政府代表の廖承志全人代副委員長・姫鵬飛外相など政府要人が駐機場に集まっていました（上から1番目）。全日空乗務員のスチュワーデスと記念撮影（上から2番目）。全日空特別機からは大平正芳外相・加藤紘一秘書など事前交渉団一行が降機しました（上から3・4番目）。

（新宅久夫）

2020年11月の行事予定

４日（水）　13：00　「自宅で俳句会」
兼題「冬銀河、今」及び当季雑詠から５句を投句（10月末までに）

12日（木）　14：00　第１回オンライン講演会（試行）
「コロナウイルス・パンデミックに当たって現代社会を考える」
井出亜夫氏（フォーカス・ワン代表理事、当会会員）

☆本講演は、zoom で行いますが、まだ試行です。したがい、そのミーティングIDとパスコードは、当会からの配信メールに登録されている方で参加希望された方には、当日15分前までに、メールにてお知らせいたします。また、配信メールに登録されていない会員・非会員向けには、当日、15分前から講演終了時間まで、ミーティングIDとパスコード をホームページに掲載し公開します。
なお、当会会員で zoom を利用できない方は、事前申込で先着５名まで、当会館５階会議室にて聴講できます（当日マスク着用・検温・手指消毒のチェックあり）。

19日（木）　16：00　自衛消防訓練（会員・テナント参加）

26日（木）　14：00　第２回オンライン講演会（試行）
「戦後75年の節目に―解題：報道写真『焼き場に立つ少年』」
石飛仁氏（記録作家、当会会員）

☆第１回オンライン講演会と同じ方法で開催予定。

11　月　の　会　議　予　定

５日（木）14：00　講演委員会（ZOOM 会議）

19日（木）13：00　理事会（第９回）
19日（木）15：00　広報委員会

※下線は通常日程に変更あり。

みんなの　写真館

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION（IGNA）
http://www.kokusaizenrin.com

ISSN0386-0345
二〇二〇年（令和二年）十一月一日・毎月一日発行
「善隣」第五一六号（通巻七八三）
発行所　〒一〇五-〇〇〇四　東京都港区新橋一-五-五
一般社団法人　国際善隣協会
電話　〇三-三五七三-三〇五一番（代表）